



2010. 11

No.10

認定 NPO 法人 C.P.I 教育文化交流推進委員会

発行所：C.P.I.スリランカ事務所

Mahindarama Road, Etul-Kotte, Kotte, Sri Lanka

日本本部：東京都三鷹市中原 2-16-9 Tel;0422-49-3808

E-mail: cpimate@gmail.com

URL: <http://www.cpi-mate.gr.jp>

「これからの、たすけあい社会」を考える

～スリランカ日本教育文化センターとの協働シンポジウムから～

9 月 18 日のシンポジウムは、意義ある対談となった



この誌面の 8 ページ以降で、パネル対談の再現を行うことになった。多ページに及ぶため躊躇したが、めったにないよい対談となったため、掲載する。パネラーの社会福祉法人佑啓会ふる里学舎理事長里見吉英氏は、日本の社会福祉の世界で最も期待されているひとりである。

また、同じくスリランカー日本教育文化センター事務局長のチャンダシリ事務局長は、スリランカ仏教会および社会福祉活動のリーダーとして、スリランカで高く期待される人になられた。

しかし、おふたりとも、初めから有名な人だったわけではない。

1980 年代の後半、やむにやまれず開始した活動が「いつの間にか、20 年以上きてしまった」とのこと。その黎明期の話は、傾聴に値する。

とくに、ご自身の転換期がとても面白い。

また、「NGO」と括られる民間団体の呼称に疑問を呈し行政との関係をどのように構築するべきか、その体験から語られる事実は、考えさせられる。対談の序章は緩やかに、だんだん高揚していく。

チャンダシリ氏の発言の中で「時代は変わる。NGO の役割は、減ることも、増えることも、変わることもある。大切なのは、いま必要なことを、速く、よいことを、できることから始めることだと思う」とあった。同時に、受益者の責任、支援者の矜持が、時代を造っていくとも。おふたりから出たそのあとの話は、是非とも我が国の政府にお聞き戴きたいところだ。8 ページ以降を、ぜひお読み戴きたい。

教育里子を代表しての話

C. P. I. の教育里子で大学 3 年生のディラン君が、里子たちを代表して、挨拶をした。

彼は音楽が好きでその道で教師になりたいと考えていた。しかし、歌が上手いだけでは教師にはなれない。これは、ほかの芸術分野も同じだが、彼の場合もシンハラ音楽の歴史に精通しなければならず、ほかの教科でも優秀な成績をとる必要があった。奨学金によって勉強を続けることができ、いまでは希望の道へ進むことができたことを感謝した。



教育里子の舞踊クラス代表も来日

次のページから紹介するが、今回は C.P.I.の舞踊のクラスで課外活動をしてきた教育里子のうちから、選抜して4名が来日した。（そのほかに、歌唱を大学で学んでいるディラン君がいる）

10年生のハシッタ君、12年生のハサンティさんとマルシさん、大学生のイシャーニさんである。彼らは勉学でも優秀で、将来が期待される。

この来日は、ULEF 文化交流基金によって航空券の購入、衣装の準備、その他事前の費用を賄い、日本での滞在のうち9月15日～19日の宿泊・関西への移動費用・その間の若干の楽しむ費用を C.P.I.が負担した。シンポジウムに参加された方々ほか寄付者の皆様が、上記負担分にご協賛頂いたことを、この場を借りて感謝申し上げたい。

来年もまた、ULEF 文化交流基金による来日が行われるので、意義ある催事を企画していきたいと考えている。地域会からの企画も受け付けたい。



舞踊クラスの里子たちは4曲も衣装を替え踊った



ドイツハーブを奏でて下さった長尾さん



多くの会員に楽しんで戴けたと思う

来場された方々88名のうち62名が会員であった。千葉の平塚さんご夫婦は、「私らのように初期に入られた方は、千葉の会でもお会いしない。今回は久しぶりに本部主催の会が千葉で開かれたので来ることができてよかった」と喜んでくださった。ちょうど同じ頃に入会された石橋さんも来られていたので、昔話もできてよかったのではと思う。会員と、はじめて C.P.I.の催事において下さった方との話はずんだようで、終了後に、入会をお申し出下さった方々もおられた。やはり、楽しい催事で気持ちはずむ中での、語り合いが大切だと感じさせられた。

来日した子どもたちは、16日～17日の準備の合間を利用して、埼玉県横瀬町に「ぶどう狩り」に出かけることができた。

会員の一木さんが、地元の人々に呼びかけて下さり、温かいもてなしを戴いたことに感謝したい。今後も地方の会員とのふれあいを増やしたい。



ぶどう狩りを準備して下さった会員の一木さん（右）

来日したハシッタ君へのインタビュー



ハシッタ君が4歳のとき、お父さんは、田舎では子どもによい教育を受けさせられないからと、首都に出てきたが、運転の技能（大型免許あり）だけで新しく就職するには、35歳の年齢では遅すぎた。テレコム社に採用されたが、臨時要員だ。スリランカは、未だにそのような、企業側にとって合理的なやり方が多くみられる。働く側からすると、不安定で薄給に甘んじることになる。母親は働いておらず、子どもには余計な心配をさせずに育てたようで、ハシッタ君は、屈託がない。通学するアナンダ・サストゥラヤ学校に訪問してみると、ちょうど『エイズ予防』の講義を、保健省の人が出張で行っていた。専門家が行う講義は、結構な数あるようだ。「性に関する講義は、男性の講師のほうが、知識を知識としてストレートに教えるからいいわよね。女子学校では、女性の講師がするのだけれど、変に恥ずかしそうに教えるので駄目ね」と、男子学校で唯一の女性である教頭先生は断言した。そういえば、日本では、女子生徒に対しても、男性の教師が教えていたような記憶が…。呼ばれてハシッタ君が校長室に現れた。椅子を勧めても座らない。学校での礼儀だという。

日本では何が楽しかったかな？

「夜のディズニーランドが美しかった」

里子の受入れでは初めて『ぶどう狩り』に行っただけで、都会と村里での違いをどう感じた？

「村の方が、雨まできれいな気がする。みんな親切だった。ただ、日本のことを話すには、日数が短かった。その日数で印象を話すのは、失礼だと思う。

もっと長くいて、いろいろ知りたい」とは、インタビューするこちらが驚かされた。

なんと言っても、ハシッタ君は14歳なのだから。踊りの先生になりたいのですか？

「はい。高地の舞踊、低地の舞踊、サバラガマ舞踊の3つを勉強している。すべての舞踊を、それぞれの歴史を含めて勉強しなければならないし、踊りもマスターしたい。大変だが、頑張りたい」

来年はOL試験だけれど、ほかの科目はどう？

「それも自信がある。絶対に合格できる」

それは頼もしい…スポーツはしてないよね？

「舞踊は全身運動で毎日練習するので、フィジカルな面でほかのスポーツまでの余裕がない。でも、ストレッチとかはかかさないでいる」

日本から里親さんが来られたら、どういうところを案内したい？

「ほかの子どものところに里親さんが訪問されたのを聞いたことがある。家に来て下さって有難いが、それだけでは残念な気がする。もう少し年齢があがってから来て戴いて、世界遺産とか、案内して喜んで戴きたいと思う」

ああ、そうか……そうだね……

「大人になってからのほうが、自由に動けるから。里親さんに喜んで頂ける自分になりたい」

インタビューを終えての感想は、舞踊で選抜されただけあって、自信と自覚をもった子どもだということだ。かなり圧倒された。

私たちの教育里子であることに、誇りに近いものを感じた、というのが正直なところだ。

大人になってからの彼ともう一度会いたい。



来日したサンディーパさんへのインタビュー

サンディーパの父親はペンキ屋さんをしている。工務店と契約しているわけではないので、仕事はあつたりなかったりだとのサンディーパの話で、生活が大変だろうと思いながら、家に行ってみた。しばらく話をしている気がついたのが、奥に置かれた水槽。「どれどれ、何の魚かな？」と見せて戴くと、そこには、高級金魚が群れをなしていた。稚魚から育てているらしい。

これは、売るのですか？

「買いたいものがあるとき、ときどき売る」

いい金魚ですね…。

「ずいぶん長いこと育てて、やっとここまで来た」
実のところ、ひと安心した。

サンディーパの、働いている兄さんが結婚して家を出たら、どうするのかと心配していたところだ。

「ペンキ屋、いつもでもできないからね」

サンディーパが教師になるまでは、頑張らなくてはと両親は言っていた。

サンディーパは、幼稚園のときから SNECC で舞踊を習い、いまは舞踊教師を目指している。

大学出て、政府の研修を一年受けて、教師試験に通るまで、あと7年ある。

「日本センターの奨学金が頼りです」とのことだ。

日本の里親さんに、日本でお会いできなかったが、次の機会には、ぜひお会いしたいと、お土産を託されて別れを告げた。



彼女の学校は、デウィ・バーリカ・マハ・ヴィジャラヤという。この学校は、女子高として最高位の学校で、入学資格は非常に厳しい。5年生時の政府の試験で高得点を取り OL 課程に入る学生、または、OL 試験の全教科で A ランクをとって高等課程に入る学生に資格が与えられる。高等課程で入る学生は、さらに面接試験を通過しなければならない。サンディーパは、後者の入学生である。

担任の教師にお聞きしたところ、サンディーパは、性格がとてもよい、勉強熱心な学生だと太鼓判をおされた。

舞踊をしているためか、ひときわ背が高いサンディーパは、まわりの学生からも何かと頼られていた。彼女の家庭はかなり大変なのに、奨学金を受けて成長し、この学校に入って、日本に舞踊で来ることができたことを、友人たちは喜んでくれていた。



自分は、いま、ステップワンだと言う。
とにかく、高校を優秀に卒業して、
大学に入り、頑張って教師資格をとり、
家族を助けながら自分の生活を確実に
したいと言っていた。
前のハシッタ君のときもそうだったが、
とにかく意志の強さに圧倒された。



(この写真は、8月に撮影したビデオ映像から起こしたため、画面粒子があらわれています。ご了承ください)

社会奉仕活動は、里子たちの義務です

上の写真は、デング熱の一掃キャンペーンで、ヒトマダラ蚊の駆除を訴えるデモを、教育里子たちで行ったときのものです、シンポジウムの対談の中で、チャンダシリ氏は、「日本の皆さんから見えないかもしれないけれど、学生たちは社会奉仕活動をしている。それは、里親さんたちへの恩返しでもあるのだ」と、話しておられました。

子どもたちは、確かに奨学金によって、学校を続けることができます。

しかし、学校に何のために行くのか、そこでの自分の義務は何かを自覚していないと、結局、高等課程に行ってから、塾三昧となってしまう、我々からすると「何だかなあ」という印象が強くなるのです。

チームワークを磨き、よき友人をつくり、社会の一員として尽くすための勉強として、日々考えられるかどうかを、私も、チャンダシリ氏も、ことある毎に子どもたちに話しています。

毎週の清掃活動も

社会奉仕活動は、そのためのいい機会を作ります。子どもたちは、毎週、日曜学校に来ますから、そのときを利用して、毎週班を変えて建物や道路の清掃をしています。

なかなか、このようなことをお話しする機会も少ないので、誌面をお借りして説明しました。

(C.P.I.会長・小西菊文)



平和になったスリランカ、子どもたちの笑顔も増していた

スリランカ里子交流ツアー2010（8月27日～9月3日）

交流団 団長：C.P.I.理事・牟田 慎一郎

恒例となった8月のスリランカ交流団だが、2010年は、九州から9名、関東から5名の計14名（一般参加4名を含む）の参加で、8日間の日程で実施した。

「去年は楽しかった」と高原さんは奥さんを、三重野さんは妹さんを誘って2年連続の参加となった。考えた末、今年は、センターでの里子との交流を1日のみとし、アヌラダプラ、ミヒンタレ、ヌワラエリヤを新たに加えた欲ばりな計画となりやや強行軍のツアーとなった。しかし、誰一人として体調を崩すこともなく、全行程を全員が無事楽しく終えることができ、ホッとしている。

初日、スリランカ教育文化センター（以下センター）にて、参加者と里子との対面をした。初めて里子と対面する里親さんもあり、感激ひとしおと言う感じだった。お昼前から夕方まで、お互いの家族の紹介、近況を聞いたり、お土産交換や折り紙交流など、ゆっくりとした時間を過ごすことができた。私の里子も2人が来てくれて、1年ぶりに再会した。

センターの一角では、屋外ステージの突貫工事が行われていて、夕方にはほぼ完成。そのステージを使って、日本への里子代表団の皆さんの踊りなどが披露され、私たちも船越さんの三線（さんしん・三味線に似た沖縄の民族楽器）、私のハーモニカとオカリナの演奏そして参加者全員による歌を披露した。

翌日から、センターのマイクロバスで、世界遺産を中心に観光にでかけた。ダンブッラのアマヤレイクホテルでは、女性の皆さんは「アユルヴェーダ」（ハーブオイルによるマッサージ）でリフレッシュ。今回初めて訪れた、スリランカに初めて仏教が伝来したといわれているミヒンタレでは、岩山のでっぺんで風速20メートル以上の強風を体験した。



スリランカの7つの世界遺産のうち5つを見学したが、それ以外にもスリランカ最大の青果市場を見学したり、途中で一般の民家も訪れ、その実生活を見学させてもらったり、ヌワラエリヤでは、紅茶工場の見学や紅茶を摘む人々との交流、滝を望む高台の紅茶の店で美味しい紅茶をサービスしていただき紅茶の買い物をするなど、実り多いツアーとなった。

ホテルは、コロンボがタージサムドラホテル（インド系）、ダンブッラがアマヤレイクホテル（湖のそばのコテージ）、キャンディがアマヤヒルホテル（キャンディの高台）、ヌワラエリヤがグランドホテル（築180年の英国調）とそれぞれ特徴のあるホテルを選んだので、みなさん方に大変気に入ってもらったようだ。

いろいろお世話いただいたセンターの皆さん方に厚く御礼申し上げます。



来年は、C.P.I.とスリランカ協力団体 SNECC との関係 25 周年です。

現地では、全国から教育里子全員が集まります。

募集

交流団募集要項と、本年の感想記を同封

来年1月13日～20日を予定

C.P.I.会員のみなさまには、ご友人をお誘いいただき、ぜひともご参加くださいますようお願いいたします。

誌上掲載

対談:「これからの、たすけあい社会」

開催日：2010年9月18日 12:00～13:30（その後、食事・舞踊・交流会）

場 所：グリーントワーホテル幕張（会場協賛）

モデレーター：認定NPO法人 C.P.I. 教育文化交流推進委員会 会長 小西菊文

パネラー：社会福祉法人 佑啓会ふる里学舎 理事長 里見吉英さん

パネラー：社会福祉法人 スリランカー日本 教育文化センター事務局長 M. チャンダシリさん

小西: 1980年代の後半というのは、国際協力においても、社会福祉活動においても黎明期だったと思う。当時のことを少しお話戴きたい。

里見: 私は、その以前、施設の指導員として勤務していた。そうすると、障害児をもつ親御さんからの相談を受けることになる。

小さなうちはともかく、思春期を超えると親では面倒をみることができなくなって困っていると切実な訴えで、もう単純に何とかしたいものだと思っていた。世間の皆様が思っている以上に、小さいうちに障害になる子どもは多くて、その人たちが大人になったときのことを想定していなかったせいか、公的施設が不足していた。そこで、私も若かったから、何とかしなくてはいかんと考えて、施設をつくろうと走り出したら、なんと土地・建物・設備を試算すると7億円ほどかかることが分かって、公的には3億ほどしか援助が出ないということで、それでも走り出したらやめられなくなったのが本当のところだ。

幸いにも親が資産を持っていたから、それで3億ほど作った。

それでも借金があったが開始することになった。いささか乱暴な滑り出しだったが、開所してみると、入所の希望者はどんどんあって、なんとか経営でき、当初の入所者は60名ほどだったが、いまは400名ほどの方々の面倒をみている。

造るとき反対運動にあったり、遺跡物の発掘問題で諦めたり、と難関があったが、結局は父の地元で土地のお世話になった。こうした苦労が昔話になったことは、有難いことだと思っている。

話が変わるが、私も厚生省の仕事でネパールのストリートチルドレンや児童労働の実態を調査しに行ったことがある。今日は国際協力団体であるC.P.I.のお世話でこの席に来ることができ、今日は、そのあたりの話もできと思う。めったにない機会なので、これを話せるのは、有難い。

チャンダシリ: 1986年に私の先輩のスマンガラさんと小西さんが日本で活動を始めたと同じ年、社会福祉団体をつくりましょうということになった。スマンガラさんが理事長になって、彼が日本との

関係があったので、スリランカと日本が協力し合うセンターということで、SNECCが始まった。

何ができるかなあと考えたとき、家が貧しいけれど賢い子どもたちに、勉強を続けられるようにし

たいと提案した。私自身、スリランカという国は学費はいらないので、それは助かったが、両親は学用品とか制服とか、学校に行くバス代とか、そういった費用をつくるのに大変だったから、途中で私はお坊さんになって家を離れ、大学まで本当に気持ちが苦しかった。

大学を出た後、モナラガラ 학교に赴任したとき、子どもたちのなかに賢い子どもたちがいたが、そのなかでも貧しい子どもたちのことは、自分のことも思い出して、本当に悲しいものがあつた。

ですから、ぜひ、そのような子どもたちを何とかしたいとの思いが強かつた。SNECCが始まったとき10人くらいの学生に奨学金をあげられた。

そのころに小西さんとスマンガラさんが仲良くなり、日本で一緒に活動をされていた。あとで私と一緒に話をしたら、小西さんと私は、考え方がまったく同じだとわかつた。私たちは、若くエネルギーがあつたので、それ以来、C.P.I.と一緒に奨学金だけでなく、いろいろのプロジェクトを行つてきた。そうして、いつの間にか、25年経つた。そういう25年間だ。

C.P.I.には力があつたので、地域センターを100以上、全国に設けることができた。

C.P.I.の教育里親制度では、里親への報告義務がある。この制度を語るとき、これは肝心な部分。子どもの住んでいるところ、途切れずに学校に行っていることを、里親さんに報告しなければならない。大学生はよく住所が変わるし、休学もする。だから、この制度は大学生への支援には適当でない。教育里親奨学金は、高校卒業までに行っている。

しかし、大学に入学する学生のためには、別の何かが必要だつた。思いが通じて、そのための基金をつくれる人が現れ、小西さんが交渉してくれて、1994年にULEFという基金ができて助かつた。

いま私たちとC.P.I.は、子どものケアのこと、里親さんへの報告のこと、地域リーダーとの関係、どれをとっても、教育のことについては、どこよりもきちんとやっていると思う。

でも、私たちは、どこかで勉強して最初からやりかたを知っていたわけではない。やりながら、これはダメだ、これは上手くいく、と勉強しながら進めてきた。子どもたちにも、何をしなければならぬか教え、2008年からは卒業生たちがお金を集めて教育里親にもなって、スリランカ人の里親さんをつくるために一所懸命呼びかけをしている。いまでは200人以上のスリランカ人が、子どもの教育を支援するようになってきた。

こういうことも、C.P.I.の小西さんが、うるさいくらいに私たちと議論して、私たちも頑張つてきた結果で、有難かつたと思う。いまスリランカの中に、これくらい学生たちの勉強を支えているNGOは他にない。

1993年に新しい建物がC.P.I.によって建てられたとき、センターのことは本格的にしなければならなくなった。私はそのとき学校の校長になっていたが、小西会長さんから「学校をやめたら、この活動にもっと頑張ることができるでしょう」と頼まれて、学校の先生をやめて、SNECCの事務局長の仕事を一所懸命することになったのも、いまから考えるとよかつたと、ふりかえっている。

小西：チャンダシリさんは、私のせいで、年金をもらえない人生になってしまつて… 私には、チャンダシリさんが「いい人生だつた」と思ってもらえるように、一緒にずっとやっけていく責任がある(笑)。私はといえば、気持ちよく仕事をして人生を終わりたいものだという死生観を追つてきたと思う。25年ほど前、「親のいない子どもはそれだけでハンディがあるから、普通の子どもたちよりも生活環境をよくしなければならない」と大津の湘南学園の中沢理事長に言われて感銘を受けた。その学園の子どもたちは、コンサートを開いて他の障害児施設の改修を支援したりしていた。受益者は喜んで支援者の側になることができる、ということを学んだし、そこにエネルギーを感じるとともに、当時は、行政は何故そのようなエネルギーを引き出せないのかなあと思った。

政府が何かするときには制度づくりに時間がかかる。よい市民が連帯して気持ちを合わせて仕事をする、スピード感あり、気持ちの響きあい心地よくて、私もずっと続けられる仕事を探していた。たまたま、よいめぐりあいがあつて、転身をすることができて、いままでやって来られたことは有難い。最近、行政と NGO の協働のことを政府もいうようになってきた。そのとき、目的・方法・成果・インパクト・日程といったことを、始める前から問われる。とっかかりに違いがある。民間の発想を大切に、それを円滑に進められるように政府が助けるという形がいいと思うが、社会福祉の世界における民間と行政との関係を、どのように考えられるか？

里見：ネパールに行ったときにショックを受けたことがある。小さな子どもが絨毯工場の中で働いていた。見た感じは、可哀そうな印象だった。「とてもつらい」という言葉がくるかと思ったら、「ここは、寝るところもあるし、食事もできるし、とてもいい」との言葉を聞いて驚いた。当時、ヨーロッパの人々は、『絨毯工場での児童労働に反対して、ネパールから絨毯を買わない』運動をしていたが、ネパールの絨毯が売れなくなると困るのは、結局は子どもたちということだ。結局は、金がないところには社会福祉はないので、子どもたちは自分でなんとかしなくてはならない。ネパールでは、街で障害児を見かけなかったので、何故かと政府の職員に聞いたところ、「とても障害児の面倒まで手が回らない」とのことだった。「食べられなければ死ぬだけだ」とも。

日本も最初は孤児院から施設の仕事が始まり、皇族の方々などが呼びかけて支援をしながら、救済事業をしていた時期がある。障害者への面倒は、始まるまでも長い歴史を経て進んできた。いまは、全面的に社会福祉行政が施設の運営資金を支えてくれている。時代の移り変わりの中で、風が吹いたということだが、それが途切れないでくれというのが本音。これからは、高齢者が増える。障害者と高齢者は、面倒をみる側から見ると同じところがある。つまり、肉親では面倒見が大変だから、施設の必要性が益々増えるということだ。入所者が施設キャパを超える日が近いというのが実感だ。とくに年金生活者は、負担が難しいため、行政は早く手を打つ必要があるだろう。そのとき、私たちもアイデアがあるので、よく話し合っていければと考える。

小西：スリランカをみていると、NGO（非政府組織）が政府を助けているような気がするときがある。NGO（非政府組織）というより、Cooperative organization In Society（CIS）というのが名前として適していると、ずっと感じている。NGO というと、別の意味合いで捉えられるときもあると思うが。

チャンダシリ：30 年続いた政府とテロリストとの抗争が終わった。30 年と言ったら、私の人生の半分になる。そんな長いことのなかで、NGO の役割は本当によく見直されなくてはならない。抗争中に、テロリストを支えてきた NGO がたくさんあったことがわかった。人権の名を借りて、人を殺すテロリストを支えるのが、NGO の役割ではないだろう。NGO の活動は、その目的とあった活動をきちんとしているかどうかが問われると思う。組織というより、参加している人々が問われることが多い。そして、社会福祉法人の中できちんと活

動している人々は、一般社会や政府の中の、よい人々とともに活動していることが多いと思う。間違いなく私たちの活動は、CIS だろう。いま、戦争は終わったが、別の闘いが待っている。

スリランカの発展のために活動すること、もうひとつは、戦争で困難になった人々を助けることで、これは急いでしなければならない。これまでも C. P. I. の会長さんと相談して、テロリスト地域の子どもの支援のことを話したとき、「その仕事は、教育里親制度には適さない」ということで、仕方なく ULEF 基金で行っていた。

ところが、ジャフナ地域でそのことをしていた地域リーダーがテロリストによって亡くなって、結局その仕事はストップした。小西会長の言われたとおりになってしまったということだ。

でも、今、C. P. I. の皆さんにお願いしたいのは、

スリランカは平和になったので、来年から北のほうの子どもたちの支援をしたい、これからはそこで教育里親制度による支援ができるので、ぜひ里親さんが増えてほしいとお願いしたい。

小西：以前、バングラディシュで、いいNGOの代表が「外国からの支援金を自分の懐に入れるような、おかしいNGOを駆逐するべきだ」とテレビで訴えたら、翌日にその方は殺されてしまった。いいNGOの活動は、そういう危険との背中合わせだと言える。チャンダシリさんは、そういう死と背中合わせの現実の中で、ずいぶん発言をされてきたので、勇気のあったことだと思っている。

私自身「その発言は危険だぞ」と言われたことが度々あった。

いま、政府が、いかに良質のNGOを選別して応援するか、協働するか、ということは大変に大事だ。

ところで、伝統的な、村々にあった社会福祉というものがある。スリランカでは、昔は村人が互いを気遣い、面倒をみていたようだ。

日本では最近、誰にも知られずに孤独死するという新聞記事をよく見かけるようになった。

スリランカでもだんだん似たような社会になりつつあると聞く。

社会福祉の、移り変わり、と、いましなければならぬポイントを伺いたい。

里見：昔の日本は、貧しかった。貧しいゆえに助けあわないと暮らせなかった。

障害者も、そういう社会の中で暮らすことができた。そういうコミュニティがなくなると、個々に暮らさなければならなくなった。韓国あたりでは儒教のせい、か親と子の関係がまだまだ強いが。

ときどき私どもの施設に「ボランティアがしたい」と訪れて下さる方がおられて有難いことだが、制度としての社会福祉を確立することが、長く活動を維持するためには必要だと思う。

私は、講演で「社会福祉にまわる税金がふえることが大事」と言ってきた。ただ、それは、行政に頼らなければならないから、というところに話の根っこが見えてしまう。これからは、考え方の根っこを変える必要があるだろう。「市民一人ひとりができる力をだすことが大切だ」という人がいる、その意味を深く考えたい。公的施設が今後は増えないとのことだから、行き場のない人が増えるだろう。じゃあ、どうするのか？ 知恵を出してみんな、解決を考えないといけないと思う。

小西：スリランカは、伝統的に気持ちの温かい人々が多い国と思っているが、いまはどうなのか？

チャンダシリ：子どもたちの勉強を助けるという視点から話をしたい。仏教の伝統的な教育の中で、親を敬うこと、人々に親切に、と教えている。しかし、子どもたちをみていると、親が病気になるったりすると、親の面倒をみるために学校をやめるケースがある。その親の面倒をみる施設は少ないから。これは、真剣に考えなければならない。去年、介護の訓練プロジェクトをしたところ、地

域でそのテクニックを知っている人が少ないということがよくわかった。スリランカも、人々の気持ちは変わっていないかもしれないが、実のところ地域社会は、ずいぶん変化している。

確かに、親が体悪くなる時、子どもに面倒見てもらうのは嬉しいことではあるだろう。けど、そのために勉強をやめてしまうようでは、やはり問題だということだ。

私たちは、介護のプロジェクトを小さく始めたけれど、教わった人たちは、また地域の人々にそのテクニックを教えることになるから、広がっていくと思う。そういう仕事をしていくと、親の体が悪くなったときに学校をやめなければならぬ子どもが、ずいぶん減るのではないか。そのようにしていかなければならないと思う。ですから、わたしたちは、奨学金をあげる活動だけではなく、地域の健康を守る人たちを増やす活動を始めたわけだ。こういう考え方は、2002年にC.P.I.の小西会長が、移動クリニックのアイデアを出して

以来、かなり検討してきたことだ。そのときから、ずいぶん時間が経ったけれど、気持ちを同じくする八幡さんによる基金ができ、昔の考えからやり方は変わったが、健康プロジェクトを始めることができたことは、よかった。小西さんも、そのことをいつも喜んでくださっていることは、本当にうれしい。

時代は変わる。NGOの役割は、減ることも、増えることも、変わることもある。しかし大切なのは、いま必要なことを、速く、よいことを、できることから始めることだと思う。

小西：社会福祉活動では、受益者がどうあるべきか、という命題があると思うが。受益者参加という視点から話を伺いたい。

里見：施設で面倒見るべきという考え方と、一般の社会の中で暮らせるようにすべきだとの二つがある。

私は、とにかく障害があっても、体に差し支えない限り、働けるよろこびをもつことが大事だと思っている。ふる里学舎では、天然酵母でつくるパン工場もしているし、ブルーベリー農園の収穫物で加工物も作っている。生産活動として、たいした利益を生まなくても、「このパンはおいしいね」「ジャムがおいしいね」と言われて、喜んでいただけることが、受益者としての障害者の喜びになる。人間らしさってなんだろうということを追求していいたらこういう形になった。

受益者は、次の瞬間には人を喜ばすことができるのだと思う。我々も地域の中で生きている。地域の人々に喜んで戴けることをしていると、最初は反対していた方々も、野菜をくださったり、声をかけたりしてくださるようになった。

いつも、どなたでも、「できることで人に喜んでもらおう」という気持ちをもつことは大事だ。私の父は91歳だが、脳梗塞で倒れたが、入院してリハビリして、いま回復して元気にしている。一方、母は84歳で認知症となってホームにいる。彼女は、私たちのことは、まったくわからない。

人間らしく生きるということは何だろうと、大変な時代にきているなあと、そう思う毎日だ。

小西：私の友人に杉山さんという方がおられる。障害があって、手足も言葉も不自由だが、その方の笑顔はいつも私たちを幸せにしてくれる。とても素敵な笑顔で、それは、立派に社会に役立っている、ということだろう。スリランカの教育里子たちも、いろいろと社会奉仕をしているが、彼らのことを少し。

チャンダシリ：教育というのは、学校で本を見ながら教えるだけではないだろう。自分のためにも、他人のためにも、国のためにも、世界のためにもなることが大事だ。例えば私は11歳で家を離れてお坊さんになった。朝6時に起きて、掃除もし

て、おまいりして、ご飯も自分でつくり、洗濯もしていた。

それだけでなく、お寺の行事を手伝うことも、袈裟を縫うこともしてきた。なんでもできることはいいことだと思っている。

私たちの教育里子たちは、毎週トイレや学校の掃除をし、学校の清掃をし、まわりの道をきれいにすることも、自分が気持ちよく勉強をすることをなんでもやれるようになっている。デング熱などの病気にならないように、地域を綺麗にするキャンペーンもしている。そういうことは、自分を助けて下さっている里親さんに喜んで戴けることだと言っている。C.P.I.と一緒に奨学金のシステムを始めなかったら、その子どもたちは勉強を続けることはできなかった。いままでに、1万人近くの子どもたちが高校まで行くために助けられた。大学に入った子どもたちも750人以上いる。

日本ではたいした数ではない、かもしれないが、スリランカでは、高校を出た中で2%くらいだから、私たちの学生の大学へ行く割合は大きい。だから、日本の皆さんから見えないかもしれないけれど、学生たちは社会奉仕活動をしている。スリランカで地区センターの学生たちによって卒業生の会ができて、みんな少しずつお金を集めて自分たちで教育里親になって、その数は最初52名だったがいま200名くらいになった。こういうことも、日本の里親さんたちへのご恩返しだと考えている。

小西：大学に行き、専門家になった人たちがいる。世の中の課題を解決するには、専門家としてその知見を生かして、速く広く動きたいと言う人々は多い。ところが、災害救援の場合でも、日本は専門家の知見やボランティアの速い活動を支える仕組みが弱い。これからの社会で必要なことは何だろうか？

里見：困っている人の立場に立つことの難しさを感じる。皆さん、自分の子どもが障害を持って生まれるとは思っていない。自分の話をしたい。私はこんな仕事をしているので、家内が身ごもったとき「どんな子どもでも可愛がって育てよう」と言ったものだ。実は五体満足に生まれたと思っていたら、心臓に病気があり、なんとか治療が成

功して生かされていて有難いことだが、人生は何があるかわからないなあと思ったものだ。子どもは、生まれる国を選べない、生まれたときの身体を選べない、だから、生まれながらに壁のない子どもはいないのだと思って、親は覚悟しなければならぬし、周囲の人々はそのことを温かく見守り、心を豊かにするようにしていかなければいけないなあと思う。

小西：スリランカのセンターに関係して、スリランカに住んでいる日本人に、知的障害の子どもがいる。その子どもには、感情も、いい感性もある。私が鉛筆を探していると、他の人は聞かれないと答えないが、その子は「ここに鉛筆があるよ」と手渡してくれる。ほんとうに、実によく気がつく子どもで、驚かされることは多い。絵もうまいし、太鼓をたたくとリズム感が並外れている。みていると、のびのび育っていることがよくわかるし、彼女はこのスリランカの社会に、小さな頃からいるので、このように育つことができたのは、やはりスリランカだなあと思う。

チャンダシリ：私はその子どもを愛している。私の子どものように思っている。その子どもを通して、教育とは何か、ずいぶん考えることができて

いる。私は、C.P.I.の小西さんと25年間、いろいろのことをしてきた。これからも、できることをやっていきたいと思う。

小西：お二人とも、たすけあい社会を大切に考え、人々を育てる、という活動をされてきたと思う。私も、まだまだご一緒させて戴きたいと思うので、宜しくお願いします。ありがとうございました。



スリランカ 現地事務所から



★象と僧と私

スリランカに初めて訪問したのは 1986 年。
当時、この国に疎かった私に、SNECC 理事長
のスマンガラ僧侶は、よく冗談を言われた。

「スリランカには、ソウも、ゾウもいるよ」。
なんのこっちゃ……。

しかし、確かに両方とも身近にいます。
この写真は、象の好きな木をあげましよう
と申し出たところ、さっそく自ら受取りに
来てくれた象さんである。

「そういうところ、ソウとゾウは似ている」
と言うと、チャンダシリ僧侶は、「おもしろい」
と笑いころげた。（会長・小西）

C.P.I.との 25 周年記念式典、おいでをお待ちします

SNECC 事務局長 ミーガハテンナ チャンダシリ

平和を続けるためにすべきことがある

C. P. I. 教育里親のみなさま、C. P. I. 支援会の
皆様、いつもスリランカの教育里子のことを
思って下さり有難うございます。

C. P. I. との関係が始まって、25 年になります。
ちょうど昨今の頃、長く続いた LTTE との内
戦終了の後始末が一段落しました。

「ほんとうに、終わったのだろうか」との、
世界中の注目の中で、政府は着実に後始末を
進め、国民はこの平和を必ず守る気持ちを固
めました。

残念ながら、30 年も続いたテロ活動の中で、
シンハラとタミール、ふたつの民族の気持ちは、
すぐには融け合えない状態にあります。
私たちは、全力をもって、この状態の改善に
努めなければなりません。

日本のシンポジウムでもお話ししましたが、
まず私たちシンハラの間が、内戦で困難な
生活状態になったタミールの子どもたちに、
手を差し伸べることが大事だと思います。

いま行われる 25 周年式典は意義が大きい

教育里親制度は、経済的に困難な、しかし
優秀な子どもたちに手を貸す活動です。

1986 年に発起し、1989 年から全国で本格的に
広げたこの活動が、北部はアヌラダプラ、東
部はカンターレ地域、ポロンナルワ地域まで
だった理由は、LTTE 地域には教育里親制度が
適さなかったからです。

いつ住所地から出てしまうかわからない、学
校の成績報告ができるかどうか不安だ、とい
う状況では、教育里親制度は動かさません。

平和が訪れたいま、私たちは、タミール民族
で住所が定着した子どもたちを対象に、教育
支援をする準備を始めています。

準備が整い次第、始めたいと考えています。
そのためには、そのための、新しい教育里親
さんが必要です。C. P. I. の皆様が、そのこと
を伝えて下さることを願っております。

今年は、式典の準備を進めてきました

私たちのセンターに、1993年にC.P.I.とSNECCが共同で造った贈られた本部建物、そのあとも贈って戴いた多目的ホールがあり、そしてお寺として、仏教関係者およびSNECCの友人たちの長年の努力で造られた、平和祈念堂とパゴダがあります。

この美しい施設を長年維持してきました。日本の外務省の資金を入れた各国の施設のなかでも、私たちのセンターの維持管理はトップクラスにいると思っております。

この式典は、私たちとC.P.I.の式典です

来年の1月の式典には、教育里子たちも、全国から集まります。

来年の式典は、SNECCとC.P.I.が築いてきた成果を多くの人にアピールする式典です。ですから、C.P.I.の皆様において戴かなくてはなりません。どうかお願いします。私たちは、皆様を大歓迎致します。

皆様の里子とも会われてください。そのための時間を用意するため、C.P.I.の小西会長さんと話し合っています。

また、式典が終わりましたあとは、世界遺産の多いスリランカを観光なさってください。きっと、お気に召すと思います。美しい滝、歴史の重みをもつ遺跡、仏教の聖地の数々、インド洋の光、人々の笑顔。これらは、スリランカが世界に誇る観光のものです。では、一月にお会いできるのを楽しみに、お待ちしております。



